



なり、沖縄も陥落していた。日本の戦争する余力は尽きていた。それでも国は戦争を継続し続けていた。そして8月6日がやってきた。

あの日は、動員中の工場が電休日だった。8時15分少し前、僕は、自宅(広島市富士見町＝爆心から1.2キロ)の庭にいた。飛行機の爆音が聞こえて間もなく、激しい爆風の衝撃で、地面にたたきつけられた。そこはやわらかい畑地だったから大した傷も負わなかった。50センチほど右にいたら庭石にたたきつけられて即死だったろう。家の前のバス通りをはさんだ向かいの家の屋根の陰になって、奇跡的にやけども負わなかった。

一瞬にして崩壊した広島町の並み。母さんは、崩れ落ちた家の下敷きになっていた。「母さん！」と叫ぶと、屋根の下から「ここよ」という声が聞こえた。「ああ良かった。生きていてくれたんだ」とその瞬間は安堵の胸をなでおろしたんだ。しかしその喜びも束の間だった。屋根板をはがして逆立ちをするように顔を突っ込んだ目の前には、家のコンクリートの土台の上に大きな梁が重なって、行く手をはばんでいた。わずかな隙間から1メートルほど先に仰向けに倒れている母さんの姿が見えた。つむった目のあたりから血が流れていた。どこかをひどくうちつけたのか、何を話しても目を開けず、顔をこちらに向けようとしなかった。「こっちからはもう入れんよ。そっちで動けんよ」と聞くと、「左の肩の上を押さえている物をどけてくれんと動けんよ」という答えが返ってきた。

別の方から掘り出したが、なかなか進まない。そのうちに爆風の吹き返しの火事嵐がものすごい勢いで迫ってきた。火の粉がふりかかってくる。気が気でない。「母さん、駄目だよ。火事の火が近づいてきたよ、こっちからはもう側まで行けんよ」悲鳴に近い叫び声をあげた。外にいる僕でさえ何が起こったかわからないのだ。まして家の下敷きになって周りが見えない真っ暗な中では不安というよりも恐怖心で一杯だったろうね。でも母さんは、「そんなら早よう逃げんさい」と言ってくれた。

それなのに気も動転していた僕は、「母さん。ごめんね。父さんの所へ先に行っていてね。僕も、アメリカの軍艦に体当たりして、後から行くからね」と言ったんだ。何という不遜な親不孝の言葉だろう。しかもその後に「好っちゃんが大きくなったら、いい所へお嫁にやるからね」と言ったんだよね。すぐ後から行くと言いながら、妹が大きくなるまで生きると言ったんだ。死別の際に母さんを裏切る言葉を告げたんだよ。そして80歳近くまで生き延びているんだよ。母さんへの罪の意識は一生だいていくよ。

母さんは、死を覚悟したのか「般若心経」を唱えだしたね。僕は、その声に後ろ髪を引かれながら、原爆の業火で生きながら焼き殺される母さんを見殺しにして逃げたんだ。2～3日後、家の焼けあとに積もった灰の中を探したら、母さんが倒れていた場所から遺体らしいものを見つけ出すことができた。それが母さんだったんだ。でもそれは人間の姿ではなかったよ。母さんは小柄な女性だった。まるでこどものマネキン人形にコーラを塗って焼いたような油でずるずるした物体だった。母さんは、あんな姿で殺されたんだね。人間としてではなく、「モノ」として殺されたんだ。悔しい。本当に悔しい。

あの日、比治山橋近くの土手で野宿した僕は、翌日紙屋町から半ば破壊された相生橋まで来て、突然絶望感におそわれた。それまで被害は広島東部地区だけだと思っていた。橋の上から見渡せる西部地区も同じように原爆焼け野原になっていた。好っちゃん(好子)は、あの年あこがれの県立第一女学校に入学できて、張り切っていたね。でもあの日は、土橋付近の建物疎開の後片付けに動員されていたんだ。相生橋から見ると、すぐ目の前じゃない。「あっ！好っちゃんもやられたんだ」そう思うと頭の中が真っ白になった。避難先にしていただ安佐郡緑井のかおる叔母さん(母の妹)の家にも、あんたは来ていなか

った。好っちゃんたちまだ12～3歳の男女中学生約5千人が、青春の喜びも悲しみも知ることなく死んでいったんだ。戦争が招いた原爆地獄の悲劇は決して繰り返してはならない。

## 2. その後の人生についてお聞かせください。

父は前の年から病の床について5月に亡くなりました。そして8月に母を失い妹を失い、孤児になりました。しかし私はどこまで僥倖というのか奇跡があるのかわかりませんが、郊外に緑井というところがあって、そこに叔母(母の妹)が嫁いでいて子ども(いとこ)が一人いました。叔父(叔母のご主人)はその日、広瀬というところで被爆して12日に亡くなりました。

その叔母の家から行方のわからない妹を探しに広島に通いました。私が病に倒れたのは9月6日、どんよりと曇った重苦しい天候の日でした。広島に入ったらどうにも動けなくて、途中で電車に乗って帰ってきた。そして駅に降りた途端に上から押さえつけられているような物凄い嫌悪感に襲われて、ようやく這うようにして帰って、玄関に入って式台に座り込んだ途端、もう動けなくなりました。ふっと見ると手・足や身体のいたる所に赤紅色の斑点が出てたんですね。そして喉が痛くてね、物も食べられない、水も飲めない、痛くて。その日は熱が出て、そのうち歯茎から血が出る、鼻血が出る。数日たったら髪の毛が抜ける。叔母が緑井の町じゅうをお医者さんを探してくれた。近所に産婦人科はありましたが、そこには広島から押しかけてきた被爆者の人たちが廊下でずっと倒れていて、肩で息をしながら治療を待っているんですが、薬剤も何もありません。そういう中で叔母は必死になって探してくれて、少し離れたところに広島から疎開をしていた歯医者さんに頼んで治療にきてもらった。治療といっても毎日、何本かお尻に皮下注射してくれるくらいです。そのおかげだと思いますが、2週間くらいたったら、なんとか布団に起き上がれるようになりました。

(「母と妹への手紙」からの引用)その後、かおる叔母さんが、母さんのかわりに僕を養育してくれたんだ。そのおかげで大学を卒業でき、大学の先生になれた。1959年に講師になって初めて教師の地位に就き、その翌年、勤務地の金沢で「石川県原爆被災者友の会」をつくり、会長に選出されて、被爆者運動にかかわるようになったんだよ。しかしつくっても、被爆者はおいそれと活動に参加できないことがわかりました。仕事をもってらっしゃる、なかなか時間がない、そういう人たちに代わってやらなきゃいけない。先生をしながら被爆者運動をすすめていくことになりました。

その中であるところにカンパをもらいに行ったら、若い秘書の人が出てきて「どうして大学の先生が乞食みたいなことをしなきゃならない」と言われ、「うわーっ」と思いました。「私たちは原爆被爆の実相を伝えきっていない。伝えられていない」と。

けれども幸いなことにその後、金沢大学の先生の何人か、それから神社の神主さん、お寺の上人さん、キリスト教の牧師さん、たちが一緒に集まってくださって、「被爆者・宗教者・科学者三者懇談会」というのをつくりました。そして1965年に原爆展を開き、カンパを集め、16人の被爆者を広島の原爆病院に一緒に連れて行って診察してもらいました。その頃、地方の自治体では原爆被害というのはそんなにわかっていなかった。被爆者の実状をわかってもらうにはそういうことをしなければいけない時でした。「三者懇談会」の協力を得て広島への派遣活動を二度行いました。そういった中で石川県が腰を上げてくれて、石川県の被爆者の検査のために広島から医者をおよんでくれと言ったら、よびましようということになって、原

爆病院からよんでくれました。今は県の中央病院や民医連の病院が中心になって検診が続いています。そういう活動を続けてきました。そうしたことを誰かがやらないと何も起こってきません。一步一步やっていく、自治体を変え、国を変えるんですけどね。そういう運動をしてはじめて国が動き出すんですね。それは僕たちのリーダーだけがやったんじゃないんです。名前が出ない被爆者の方々が、支援者の方々が支えてくださったからできた。そして国を動かして、やっと1994年に「原爆被爆者に対する援護に関する法律」というのをつくらせました。でもその中身は、本当に原爆被害を過小評価して、とても原爆被害の実態に添うものになっていません。

（「母と妹への手紙」からの引用）定年になって千葉県に移り住んで、今は被爆者の全国組織である日本原水爆被害者団体協議会でボランティアとして事務局次長になって活動しているよ（現在は代表委員）。その間にも多くの被爆者と同じように原爆被爆の影響で晩発性放射線障害のがんや原爆白内障にもかかった。中でも前立腺がんは、薬物療法による治療を受けて、体内にがん細胞をかかえたまま、運動に努めているよ。母さんたちのことは、ちゃんと胸の中に叩き込んで証言活動しているよ。繰り返すことは、決して許されないことだから。

でも僕たちが体験したことよりも、原爆は、もっともっとひどくつらい体験を被爆者に与え続けているんだ。そのような被害を、僕たちの子孫、そして日本国民、さらに人類の上に、再び繰り返させたくない。だから「ふたたび被爆者をつくるな」と核兵器の廃絶を訴え、国が、その「証」として戦争被害、原爆被害に対して将来にわたって補償することを求めて頑張っているんだよ。2020年には核兵器を完全に廃棄させようという運動が進められている。その目標が達成されたなら、その時には、母さんたちと一緒に空の上ってお星さまになりたいね。

### 3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいこと をお聞かせください。

一番大切なのは「継承」という問題。こういう被害を過去の歴史の問題だというのではなくて、追体験することで「私たちはそういう被害にあいたくない、また人もあわせたくない」という気持ちで、自分がどう関わっていかねばいけないかと考えてほしい。

一番大切なのは「継承」という問題ですから、それをどういう形ですすめたらよいか。いま皆さんの印象に一番残っていらっしゃるのが、おそらく東日本大震災と福島原発の問題だと思います。あれはおそらく身近に考えてらっしゃると思うのですが、福島あるいは東北へいらっしゃっても、それは直に見た体験ではなくて、追体験ということになるわけですね。そういう意味では広島・長崎の被害も、実は皆さんは体験していらっしゃらない追体験の問題ということになるわけです。僕は追体験する場合には、「時間」と「距離」ということが非常に重要だと思っています。

僕は8月になると広島に落ちた原爆のきのこ雲がテレビの報道などで出てきますね。あれを見る度に、今ここにいる自分と、あそこにいる、あそこで蠢いていた自分との2つがダブっているんです。これは「時間」でもあれば「距離」でもあります。

また、ある人が言っていたのですが、今の戦争というのはかつての戦争のように銃をもって突っ込んでいって戦うのではなくて、ハイテク兵器で遠くにいる。原爆もそうですが、第二次大戦では様々な都市を

空爆して多くの非戦闘員を大量殺戮した。日本も重慶に無差別攻撃をやったが、ドイツがやったゲルニカがあって、その後イギリスがドレスデンをやったというように、離れたところから爆弾を落として、下であるいは遠くで死んでいる、死に様を見ないで、距離で離れて見ているから本当の戦争の被害を身近に考えたりとらえることがない。第一次大戦と第二次大戦のひとつの大きな特徴になってきた。科学技術の発達によって戦争が人々の命、死というものとの関わりを遠ざけてしまったというのです。これが「距離」ということです。

そして「時間」です。時間が離れることで記憶が喪失していく。そういう意味で「継承」という場合はそのことを考えた上でやらないと、本当の意味で理解はできず、追体験にすすんでいかないということになる。

そして、自分の問題として考えない限り、核兵器廃絶の問題は共通理解の問題になってこないということを含んで考えて欲しいんです。皆さん方に原爆被害、核被害の継承のリーダーになっていただきたい。これが長野の前座良明さんが「今日の聞き手は明日の語り手」と言ったことなんですね。私が今日一番言いたいのはそのことなんです。「僕は私はそんな被害にあいたくないんだ、だからほかの人たちにもあわせたくない」という世論を広めてもらう、私はこの会はこういうことをめざした会だと思うんです。そうでなかったら核兵器の廃絶というのはいかならないと思うんです。大きな世論が高まっていくこと。核兵器をなくすためには、署名は大切です。署名を何百万、場合によったら1000万積んでもいい。だけどそれと同時に、それを持って国連へあるいは核保有国へ押しかけていくくらいの運動にならないと、核兵器の廃絶の未来というのはそう簡単にやっけないと思うんです。

いま私は癌をかかえていますし、余命いくばくもないかもしれませんが、平和市長会議提唱の「2020 ビジョン」まで生きると言っています。生きてどうなるのか見守りたいと思うのですが、だけどやっぱりそれだけの大きな世論が起きないとダメなんですね。それには、草の根の運動、その力、その広がり、大きな世の流れになっていく、そして初めて変わっていくと思うんですよね。国連事務総長の潘基文(パン・ギムン)さんが「被爆者が生きている間に核兵器を廃絶したい」とおっしゃった。それを受け止めながらやっっていかなければならないと思うんです。

私たちは今、核兵器だけではなくて核の被害に直面しているわけです。その核の被害の脅威から私たち自身が身を守るためにどうしたらいいかということを考えていく非常に重要な時期にきていると思います。これからまさに何年か皆さん方が特に若い方が家族をもち、そして時代の中で生きていけるためにはみんなで力を合わせていく、それが大切な時期になってきていると思うんです。自分だけの問題ではなくて、自分たちだけでは生きていけません。みんなの力が必要です。

### [聞き取りをおこなった方の記入欄]

聞き取り日時	2013年10月19日(土)13:40~14:30	場所	主婦会館プラザエフ
聞き取りをされたのは	ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承の会 「被爆者の証言を聞くつどい」Aグループ:聞き手:8名		
聞き取り票記入者	三崎 敬子	TEL/メール	
連絡先	「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」事務局気付		

#### 4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

Sさん(被爆者): 横浜出身だがキリンビール勤務の父親の転勤の関係で広島にいて被爆した。学徒動員で江波というところにいた。町工場から爆心地に向かって歩いたので地獄を見た。東練兵場のあたりに住んでいたのが爆心地を通って夜8時頃に帰った。練兵場には大勢の人がお化けのようになって逃げてきた。その凄まじい地獄のような所でひどい火傷をした奥さんのお産が始まって、私の母親が引っ張り出してオギャーと言って生まれた。私の母親もその母体も亡くなっているのにその赤ちゃんは生きていた。20何年前に被爆の体験記『青いトマト』を書いて、その中にこの出産のエピソードがあったのを朝日新聞の記者が読んで「あの時の赤ちゃん、生きてるわよ」と連絡してくれて劇的な対面となった。その方は私には会いたいは一切取材は受けないと言っていた。被爆のことは言いたくないから新聞に出るのは嫌だと。僕も何度も入院退院を繰り返して惨憺たる人生だった。兄弟も娘の結婚のことがあるから絶対言わないでと言った。それでも途中から言わなきゃいけないなあと考えて、中村雄子さんたちと言いだした。それでもやっぱり僕のノーモアヒロシマの思いを、我々はもうあとが残っていないので語り部としてつらいでしょうけれど後を継いでくださいとお願いした。やっとの間OKが出て新聞に出てくれて記事になった(コピーを配布してくださる)。私も岩佐先生と同じで歯茎から血が出て止まらなくなり、髪が抜け出して赤い斑点が出始めた。家族を市内に探しに行った人が帰ると死んでいくという話が出て、僕の出血の症状もあって、この爆弾はおかしいから、会社に横浜に引き上げさせて頼み、1か月後にやっと帰ってきた。それからすぐに原爆症で昭和21年まで入院して一応治ったので慶応に中学から入った。それからずっと9年間は原爆のことを全く忘れていて、野球で甲子園に行ったりした。社会人になって2年目の昭和30年、立ってられなくなって慶応病院に行ったら広島にいたと言ったら1年間モルモットのようにされてしまった。そこから原爆症の入院退院が始まり、10年目から原爆症と闘い始めた。やっぱり伝えなくてはいけないなと思っている。広島でも8月6日を知らない子がいる。広島ノーモア・ヒロシマの運動をやっていない人は嫌がったりこわがったりしている。でもやっぱり我々最後の語り部として言わなくちゃいけないなと思ってやっている。皆さんのように結集してくださるのが有難い。継承していただき、唯一の被爆国から発信していけるよう頑張ってください。

Nさん(被爆者): 私自身は長崎で2歳か3歳だったので記憶体験が全くなくて、親や先輩から聞いたことをいかに若い世代に伝えていくジョイントの役割としてどう伝えるかということを考えている。証言するたびに身を切るような思いがフラッシュバックされ、そのつらい思いを68年間引きずって生きてきたことをお話しされていることをどう聞くか、感謝して謙虚に受け止めていかなければならないなと自戒している。10フィート運動でつくられた映画を全米で2年間上映活動をした中村里美さんが今年つくった映画「アオギリにたくして」は、20何年前の沼田鈴子さんの一言「死ぬことは簡単だが、生きて被爆の体験をどう生かすかが大事だ」という言葉がスタートだったと新聞に出ていた。被団協さんや東友会さんと連絡をとって語り部の方と受け継ぐ方とのジョイントになっていくかということで集まっていたが、こういう方々とネットワークを張って続けていき、日本から発信していきたい。

Hさん(生協職員): 小さい頃に見た被爆者の写真や聞いた話で私の中では10代の頃とかこわいイメー

ジがあって、そういったことを自分からは知ろうとしない、聞かないようにするような10代、20代前半を過ごしていた。その後生協に入って配達を経て昨年からは仕事で平和担当になった。苦手だと思いつつ少しずついろいろなことに関わってきて、今年初めて沖縄や広島にも行かせてもらって、こういう話もたくさん聞かせていただくことがあった。ひとり一人のお話を聞くことでひとり一人の思いとかその方の生きてきた人生とかがあることにふれて、これまでは勝手な自分の思い込みで見ていたなど最近思った。一人では生きていけないというお話もあって、これまで自分だけでどうにかして仕事を頑張ろうと思って、自分でいかに仕事を全部やるかみたいなイメージで逆に自分で自分が苦しくなっていて、最近みんなにいろいろ助けてもらって、できないことはできないと言って他の人に協力を得たりとかしてよいのだと思えた。自分のところでは被爆体験の聞き取りの取り組みに新たに関わることになるが、お話をうかがっていて今後のところに活かしていきたいとあらためて思った。

Yさん(元生協職員): 3名の被爆者の方の貴重なお話をうかがった。仕事をしていたころは、朗読のサークルで原爆詩も朗読していたが、被爆者の方の深いお話を直接お聞きするのは初めてだった。被爆者運動もよくわかっていなかったのも、岩佐さんが運動について語ってくださったのはよかったと思う。

Iさん(大学4年生): 高校生平和ゼミナールの方から声をかけてもらって参加した。中2まで広島にいて平和教育を受けていたが、中3から東京に来たら歴史の授業の最後の方にちょっと出てきただけでその差に驚いてしまった。教育実習で高2と中3の生徒を担当し、佐々木禎子さんと千羽鶴の話なども盛り込んで平和教育の授業をやった。核抑止論も紹介しつつ、日本が核兵器を持つことに対して生徒にアンケートをとったら 10%は持った方がよいと回答した。事実を知らないで自分がどうなるかという想像力をもてないのだと思う。民間の会社に就職するが将来は平和教育に関わりたいたいと考えている。

Oさん(司会、生協職員): 自分の生協では組合員さんの自主活動として被爆者への聞き取り活動が長く取り組まれていたが、自分は2年半前に今の部署に異動してきて初めて平和の活動に関わった。栃木出身で広島・長崎の友達は平和への意識が高いというイメージがあった。生協の平和の取り組みも自分たちの世代にはつながっていない(「平和」は成果がみえづらいし、メインの仕事にはなりづらい)。今回のお話をお聞きして、若者の自殺が増えている問題などにもこういうお話を伝えていくとよいのではないかと考えた。また、祖父母は満州から引き揚げてきて苦勞していると聞いているが、その苦勞の末に今の自分たちがあるのだと思えた。もっと家族で話をしたいと思っている。次回からの平和活動の集まりなどにも活かしていきたい。

Mさん(事務局): 被爆の体験だけでなく、その人の前後の人生も含めてお話を聞きたい。ある被爆者の被爆直後の気持ちを最初はよくわからなかったが、生い立ちからのお話を聞いた時に初めて素直に受け取ることができた。証言する時の葛藤などもよくわかった。短時間ではお聞きできないので、同じ方から何回かに分けてお聞きするという取り組みも大事。

K(記録係、生協職員): 私の母は東京の空襲で焼け出されていて、8月の広島・長崎の報道を見ると被爆者だけ特別扱いをするのはおかしいと文句を言っている。原爆被害と他の空襲被害の違いについて説明はしているが、国民の中で認識が共有されてきていない問題を痛感する。それは日本における社会的な運動の多くが分断してきたしまったことも大きな原因だと思う。ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承の会の場ができて大同小異で一緒にやれるはずなので、取り組みを前にすすめて欲しい。

以上